

西山善慧上人御法語

底本  
对校本

森英純  
森英純  
笔写本  
所藏  
惠空本

## 西山善慧上人御法語

諸經<sup>①</sup>の心にては止悪修善せずしては生死解脱のいはれあるまじきを、今の宗のこゝろ、正覺の体をきくまへには、止悪修善せずしてはかなはじといふべき事にてはなきなり。さては止悪修善せずとも、とはいはるまじき也。一善一法の外に名号の体もなく仏の覺体もなきゆへに、一善一法を修すべきにてあるなり。かく心うれば邪見と自力とが破れて除く事也。仏の内証の智恵が名にきはまりて、仏のさとりをきけば迷の衆生なき也。一代の定散を南無阿弥陀仏の体ぞと説入れたるこそ觀經の体にてはあれ。仏をも阿弥陀仏と説くべきを生諸仏前と説きて、地体<sup>④</sup>諸仏の功德は皆弥陀の功德にて凡夫に成じてあるらん事のうれしさよと仏をたふと思へば、此の心の中に一切の諸仏如来入集りて衆生のまよひの心をも、おしむ命

①經 〓 側註「經は異本には宗」

②いはれ 〓 「いはれは」

③まへ 〓 「まへ」は「時、場合」の意

④体 〓 「觀」

⑤入集りて 〓 「入集りて仏のさとり  
の体へ」

① おもおさめとりて一体にして、衆生を仏の体として仏にならせたま  
 ひたる故に、仏が往生の体にてはあるぞとは申す也。かく心得るが  
 即ち南無阿弥陀仏にてある故に、心に思ふも、口に唱ふるも一にて  
 ある故に、念声一体とは申す也。南無阿弥陀仏と唱ふるこえのこ  
 ろに念あり、念のところに声ある也。されば我等が口に南無阿弥陀  
 仏と唱へ、心に此のいはれを思ふ此外に三世十方の諸仏もましまさ  
 ず、十方の浄土もなき也。此謂れをきく外に仏の正覚もなく衆生の  
 往生もなき也。此のいはれをしるを三心ともいひ菩提心とも云ふぞ  
 と心うるなり。此謂れをいつも心にかけて念仏申す人を即阿弥陀仏  
 とも諸仏如来とも心うるにてある也。仏のやう(様)をしる心をさして十  
 方浄土ともいふ故に、極楽を遠からず仏も遠からずと云ふ。心を本  
 として我心の外に仏なし、浄土なしと云ふ時は、諸法成就せでは仏  
 も浄土も遠くなりて、我等がためにはやく(益)なき也。惣じて仏と云ふ  
 は我等に替りて修行して凡夫のう(上)えに成ずる別願の体をあらはず外

① おも「を」

② 菩提心「又、菩提心」

に、三世の十方の諸仏の功德、諸法のりしやうの体はなき也。<sup>(利生)</sup>惣じて仏と云は釈迦も薬師も弥陀も諸仏も、我等が往生の体なるところ<sup>①</sup>南無阿弥陀仏とは申す也。されば念仏申して往生をするにてはなくて、南むあみだ仏が往生の体にてある故に、唯念仏申せとはすゝむる事にてある也。南無阿弥陀仏と申すを行にして往生せむとする時は、仏もむかへず凡夫も往生すまじき也。行と云ふは南無阿弥陀仏の名号を行とはいふ也。此の行が凡夫に成じたるを念仏の行者とは云ふ也。数をとりにて念仏申すを行者とはいはぬ也。又往生の体を名号と云ふ也。釈迦はたゞ極楽をすゝめ、弥陀は浄土に住して我等を来迎する也。さて浄土に生ずる外に何とさとりひらくべしと云ふ事はなきなり。しかるあひだ、まよひとさとりとより外になきいはれを、浄土穢土の二としたるなり。迷ひは穢土、悟りは浄土也。さてりといふは阿弥陀仏の体より外には諸仏もなきいはれ也。迷の我等が上におひて正覚を成ずる時、迷悟が一になりたる所を南無阿弥陀

① ところ「ところを」

仏六字の名号と申す也。然る間、南無は迷の衆生の体也。覺りと云ふは阿弥陀仏の体なり。この二が一になりたる所を仏につけては正覺といひ、凡夫につけては往生と云ふ也。此の謂れをこゝろえたるを、三心とも歸命とも南無とも發願とも歸依とも正念とも憶念とも菩提心ともあまたに申す也。よく／＼心うべき也。かく心えたる所がやがて名号にてはある也。必ずしも口となへたるばかりが名号にてはなき也。念声一体と云ふはこれにてあるなり。此の謂れをこゝろえんずる<sup>①</sup>を即便往生ともいひ、機法一体ともいひ、証得往生とも云ふ也。仏の悟りが衆生の往生の体にて、衆生の往生の外に仏の正覺もなき也。此の南無と云ふはまさしき我等が体なり。則ち三心也。三心と云ふは心うる心也。心うると云ふはしるなり。しると云ふはきくなり。聞は知なり。是を心想といひ、是を南無といふなり。此の南無、阿弥陀仏のさとり<sup>(得)</sup>の体に具せられて名号となるぞとこゝろうる所<sup>(心)</sup>が往生にてある也。此のいはれを心うる所<sup>(得)</sup>を即便往生

①んず「し」

②の「も」

と名づくる也。

西山証空上人御詞也。

元禄己巳年閏正月十二日書写之畢、但脱字脱句所々不審アリ後輩願ハ尋ニ正本ニ而糺レ之 惠空叟

右者大谷大学所蔵惠空写本ヲ臨写セシモノ也。

大正十三年十一月

昭和九年三月上旬 以龍谷大学研究室所蔵本於同研究室書写畢

西山末学

森 英純

惠空末奥書

右一卷西福寺惠空所持之写本令借受奉頓書写者也

校合畢

于時宝永四丁亥年三月朔日写之畢第四世惠雲写之者也

蕙恚(花押)